

新型インフルエンザに対する企業のリスク対応事例(BCP)

東南アジアを中心に発生している鳥インフルエンザは、人から人へ感染する新型インフルエンザへと変化するリスクが極度に高まっている(WHOパンデミックフェーズ3)。そこで、事業継続計画(BCP)の観点からいち早く対応されている富士ゼロックス社の木船危機管理担当マネージャーをお招きし、新型インフルエンザの基礎知識と対応事例を紹介戴いた(参加36名)。

パンデミック

世界的な感染症の大流行をパンデミックという。歴史的には14世紀にヨーロッパで流行したペストや、19世紀から20世紀にかけて7回も大流行したコレラなどがある。インフルエンザは1世紀に3回の頻度で発生しており、1918年のスペイン風邪(全世界で2,000万人~5,000万人死亡)、1957年のアジア風邪(全世界で100万人~400万人死亡)、1968年のホンコン風邪(全世界で75万人死亡)などがある。現在は航空機などの発達により短期間で世界中に拡散するので、パンデミックが起こりやすい社会になっている。

高病原性 A/H5N1型インフルエンザ

スペイン風邪やホンコン風邪が弱毒性であるのに対し、A/H5N1型は強毒性を示し感染すると死亡率が高い(現在約60%)。また、SARSが感染するとすぐに発病し見分け易いのに対し、A/H5N1型は潜伏期間が1~4日あり、発病前から他へ感染することから、封じ込めが極めて困難。

富士ゼロックス社の取組み「正しい恐怖心」

ミッションクリティカル(24時間365日止まらないことを要求される基幹業務)に影響を与えるリスクとして05年より研究を開始。対応しなけ



熱心に説明する木船マネージャー

ればどうなるかという「正しい恐怖心」をトップや全グループ会社で共有化している。

海外事業所で1名でも発症したら、本社の対策本部を立ち上げる。本社も在宅勤務になることを想定しバーチャル対策本部を作成済み。

1名でも発症したら、その事業所を閉鎖。全員自宅待機。他事業所への移動を10日間禁止。罹患・回復情報を管理し、免疫ができた回復者による事業継続チームを編成する。

全事業所・支店に連絡責任者を第3順位まで指定し、全従業員の緊急連絡網をメンテ、等々。